

〔閑田耕筆〕<sup>三</sup>飼鳥を好む人は非にして、飼る、鳥のやうを知る人にきけば、奇特なるものなり、巢ながらに畜れて、籠の内をおのが所とし、山野の廣莫なるを去らず、子鳥の時は付親の音を大事と聞うけん、とす、親鳥と呼ばれては、子鳥あまたつどへるを、門弟子のおもひをすらん、先音をたてんとしては、能餌をえた、めて後、あるは去ばし、休らひ心を去つむるさまにて、鳴出るが甚つ、しみて引色まで、まさしくくり返し、教る趣なりとぞ、人は教るもまなぶも利欲といふもの、の病になりて、其正を得ざるも多きに、小鳥の振舞感せざらんや、

〔風俗文選〕<sup>三</sup>百鳥譜

支考

三光は啼時に月日星といふなるよし、むつかしとも思はめ、や、佛法僧と啼鳥ありて、高野の山にのみ住なる、是をも三寶とこそいはめ、玄かるに鶯の法華經と唱ふる、さるは世さらに老めきたるわざ也、提壺テウの美酒をかひ、布穀の袴をぬげよといふは、皆おのれがゆるならねど、世の人のしからしむるものなるか、蜀魄の不如歸と啼は、きはめて托物の聲ならくのみ、秋の鴈の江夫におくれ、時鳥の曉の雲にさけぶ、いづれにかさだめ侍らん、鴈はあはれに、ほと、ぎすは悲し、鸚鵡は恩をわすれぬよし、此國にはまれ、なればよくもしらす、むかし蔡君が鸚鵡は、琵琶が身まかりし跡の名を呼つたへしに、心をいたましむ、瘴江のほとりおなじくあそべども、おなじくかへらずといへる、配所の詩ならば、さもあるべし、我國の鳥も、物はえいはずして、萬里の別をしたひ行けるとかや、扶桑十夷志八、有飼鳥、是さへおもひかけぬ事なるべし、

飛翥

〔新撰字鏡〕<sup>羽</sup>翥、止、逆、利、舉、比、翔、奴、也、

〔段注說文解字〕<sup>羽</sup>翥、飛、舉、也、方言曰、翥、舉、也、楚謂之翥、郭云、謂、从、羽、者、聲、章、庶、切、

〔倭名類聚抄〕<sup>羽</sup>族、體、<sup>羽</sup>翥、字、附、<sup>翥</sup>、軒、翥、也、西、京、賦、鳳、翥、於、雲、標、、<sup>翥</sup>、文、選、射、雉、賦、、飛、舉、也、

〔日本靈異記〕<sup>上</sup>、嬰兒、鶯、所、擒、以、後、國、得、逢、父、緣、第、九、